

## 人間への信じやすきもの

トーマス・ギロピッチ著

評者・米沢富美子

たとえば、あまり価値のないものを法外な値段で買わされたとか、いかさまの痩身(そうしん)術を契約してしまったとかいうニュースを聞いて、自分とは無縁の話だと思ったことはないだろうか。しかし実際には、間違った判断をしたり誤った信念に陥ったりする危険は、誰(だれ)にでもあることを、豊富な事例によってこの本はまず教えてくれる。さらにその原因が、認知的・動機的・社会的な要因に分けて説明されている。

分の信念に合致した情報だけを捜そうとする傾向があること、曖昧(あいまい)で一貫性のないデータを先入観からの期待で解釈しがちであること(すなわち、信じているとそう見えてしまうこと)などが指摘される。

社会的要因としては、人づての情報は、伝聞の連鎖が長くなればなるほど、歪みが大きくなること

具体的な誤信の例として、「実証されていないあるいは効果のない健康法」「うまくいくはずがないにもかかわらず信じられている人づきあいの方法」「超能力の存在」を取り上げ、これらの誤信がどのように生じ、なぜ修正されないのか、その理由を右の三つの要因を基に説明している。

最後の章では、誤信を持たないための処方箋(せん)が示される。本書で議論されていることは、どれもこれも言われてみれば身に覚えがある。誤信を引き起す畏(わな)は、実はわれわれ自

## 誤信の原因を三要因に分けて説明

認知的要因として、われわれは、推論の基礎とするデータそのものに内在する歪(ゆが)みを見抜く能力が不完全であること、自

動的な要因は「欲しいものが見えてしまう」という一言に尽きる。アメリカでのある研究調査によると、大半の人間は「自分が平均以上に知能が高く、平均以上に公平であり、平均以下の偏見しか持たず、平均以上に自動車の運転がうまい」と思っていることが分

と、「マスメディアの多くは客観的で正確である」という必ずしも正しいとはいえない世評が定着しているため、マスメディアのふり撒(ま)く不正確な情報や作り話が、人々の誤信の特に強い原因となっていること、などが論じられる。

本書で議論されていることは、どれもこれも言われてみれば身に覚えがある。誤信を引き起す畏(わな)は、実はわれわれ自

とところで——と読みおえたあと本をおきながら私は考えた。著者の言うことをこんなにも易々(やすやす)と信じてしまつてよいものだろうか。

(守一雄ほか訳、新曜社・三三二一・二、九八七円)  
 ▼ Thomas Gilovich 54  
 年、米カリフォルニア生まれ。コネル大心理学教授。